

氏 名（本籍）	漆	麟（中 国）
学 位 の 種 類	博 士（芸 術 学）	
学 位 記 番 号	博 甲 第 6199 号	
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科	
学 位 論 文 題 目	中国の抽象絵画にみる「伝統的背景」と「現代性」	
主	査	筑波大学准教授 博士（工学） 山 本 早 里
副	査	筑波大学教授 博士（芸術学） 齊 藤 泰 嘉
副	査	筑波大学教授 穂 積 穀 重
副	査	筑波大学准教授 博士（文学） 八 木 春 生

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

1970 年代より本格的に発足した中国の現代美術は、自らの美術様式を展開し、多種多様な表現スタイルが現れてきているものの、中国の文化、政治的記号を利用する表現が主流である。一方で、伝統的絵画表現、特に水墨画による表現を原点とし、昔ながらの素材である宣紙、墨、天然顔料などを用い、特徴のある造形を構築する試みがみられる。これらの作品は主に抽象絵画であり、より本質的に伝統的美術を問いながらその現代化を促す表現を求めており、このような抽象絵画は中国の現代美術における新たな展開の可能性を持っていると考えられる。近年、これらの現代中国の抽象絵画を整理する動きが見られるが、少数の作家や作例に関する論述にとどまるものが多く、中国の抽象絵画の歴史的変遷や造形上の分析に踏み込んだものは少ない。本研究では中国における現代抽象絵画の発生の背景、その展開を分析し、特徴を明らかにすることを目的としている。

（対象と方法）

中国の現代美術全体に関する考察を行い、抽象絵画を位置づけるために、作品、展覧会の図録による作品の分析、評論による考察、および作家に対するインタビューを行っている。現代の抽象絵画における伝統的絵画表現の影響を考察するため、文人画およびその思想が誕生した源流にまで遡り、禅画、大写意の水墨画の筆墨、形態、構成を考察している。さらに現代中国の抽象絵画を、中国の伝統的美術および西洋及び日本の抽象絵画の作品との比較をしているが、その際に先行研究にみられる美学的な視点とは異なり、構成学的な視点から作品の造形的特徴を明らかにし、それらの特徴を形成する要因としての時代的、文化的な背景を探っていく方法を採用している。

（結果）

現代の抽象絵画が発足した 1976 年より現在に至るまでの約 30 年の変遷をみた結果、大きく 1989 年を境として前後の二つの時期に分けられることを示した。1989 年までは、1976 年～85 年の上海抽象絵画の潮流がみられ、全国的な「85 新潮」美術運動を中心とする 1980 年代の抽象絵画の動きがあったことを述べた。1990 年以降は、現代美術をめぐる背景が転換され、次第に中国的記号性を求める表現様式が形成されつつ

あることを示し、このような背景から中国の抽象絵画は西洋抽象絵画の模倣から独自の表現スタイルの探求へと移行していき、伝統的水墨画の再認識に伴う表現の変貌がみられることを指摘した。

この伝統的水墨画の歴史的経緯を遡り、その思想と表現手法を改めて整理し、抽象的表現の顕在を確認した。非再現的な絵画表現として「禪画」および明代に展開された「大写意」の水墨画と構成的山水画の表現の筆墨、形態、構成において抽象表現が観察されることを示した。

20世紀以降に西洋抽象絵画の影響を受けた中国の作家らは、伝統的絵画におけるこのような抽象的表現を再認識するとともに、それらの表現に共感し自らの制作に活用しようとし始めたが、この結果、伝統的表現を借用し類似する作品がみられる一方で、伝統的表現および思想を意識しつつも、表現形式の抽出および再構築によって新たに構成された作品もみられることを指摘した。後者の作品は伝統との決別を訴えるとともに、西洋抽象絵画の表現とも異なり、現代が解釈する「伝統的背景」の再構築と、それに伴う「現代性」を形成していることを明らかにした。

(考察)

中国における現代の抽象絵画は、主に抽象表現主義を踏襲するものと、伝統的水墨表現から逸しないものとなっていたが、1990年後半から独自の表現スタイルを持つものが現れた。伝統的絵画からの考察と作例の考察により、後者の作家らは「伝統的背景」と「現代性」を模索しながら制作していることを示したが、これらの作品における「伝統的背景」は実は作家らによる再構成された「伝統」であることを指摘し、このため現代の抽象絵画を「伝統的美術への問題意識」「統一と調和を求める画面」「絵画を通しての体験の表出」と特徴付けた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

中国の現代絵画における抽象絵画の位置づけを適切に行っている。約30年にわたる抽象絵画の変遷を詳細に読み取り、1989年を境にした前半期と後半期の抽象絵画の特徴を明確に示した。特に後半期においての絵画の特徴を「伝統的美術への問題意識」「統一と調和を求める画面」「絵画を通しての体験の表出」にまとめた点は新たな試みである。この中でも「伝統的背景」の再構築における「伝統」は作家らの解釈であることを、作品を丹念に調査し、作家らへのインタビューを行って明らかにした功績は大きい。これは、特徴を明らかにするために縦軸として「大写意」をはじめとした中国美術の歴史的変遷を構成学的に見直し、さらに横軸として西洋や日本の抽象絵画との思想的、表現的考察を丹念に行ったゆえに導き出された結論であり、今後の発展が期待できる。

平成24年1月20日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。